

鐘楼改修特集号

令和2年1月1日発行
四日市市西日野町2970
顕正寺 TEL 059-321-0225

鐘楼の老朽化と懇志のお願い

本寺の鐘楼は、嘉永7年(1854)に建立されたとの記録がありますが、老朽化も目立ち、瓦や垂木の傷みもひどく、近年は鐘楼自体が南西に傾き、このままでは倒壊することも予想されることから、早急に改修する必要が出たきました。

折しも令和5年(2023)には、高田本山にて特別法要(開山親鸞聖人ご誕生850年、立教開宗800年、中興上人500年忌本寺の鐘楼は、聖徳太子1400年忌奉賛法会)が行われることもあり、これらの資金を調達するため、檀信徒一軒あたり20,000円以上の懇志をお願いしました。

懇志の目標達成、改修完了 — ありがとうございます —



檀信徒の皆様には年金生活者も多く占める昨今ですが、令和元年11月末現在、顕正寺・放光寺の両寺併せて369件8575千円の懇志を頂きました。

これに住職及び両寺からの献金、前回の御恩忌の余剰金などを加えて約2300万円の資金によって、鐘楼の改修・裏門や正門及び水屋の改修を行い、後年に行われる特別法要などを実施していきます。

鐘楼改修から完成まで一目でみる工事の変遷

足場の設置



古い瓦の撤去



鐘楼を棟上げ



土台の整備



土台に鉄筋を



土台の歪み修整



垂木を新調



瓦の本葺き完了



改修完成



鐘楼の特徴の一部

入母屋作り本葺き



扇垂木



斗供出組一手先



新梵鐘の鑄造記

本寺の鐘楼は、梵鐘が江戸時代延宝6年（1678年）に作られたとの記録があり、340年の年月が経過しています。その後、梵鐘は昭和18年、国の命令により軍需物資の一部として供出し、新たに鑄造する必要がありました。

終戦後の昭和22年に、田中林三郎、伊藤庄左衛門両氏の発議の後、本寺24世住職(真弓慧光)、佐々木卓(元芸大学校教授で現住職の義理の叔父)、総代平井清之助、後藤善之助の各氏が桑名の中川裕次氏に依頼したところ、快く引き受けてくれたとのこと。

口径1尺、重さ約300貫とし、さしあたり金二百円にて鑄造契約がなされ、中川鑄造所にて、文化勲章受章者で帝国技藝院の香取秀真氏の手によって鐘が作られました。

新梵鐘鑄造に伴う撞初の法会

昭和22年4月27日午後5時に香取氏自ら柄を取り、居込みの儀式を行い、この間住職が阿弥陀経を読み、鑄込み完成の後、29日から研磨のために門徒が交代で出張した。

その後5月1日早朝、庄左衛門の自家用牛車にて桑名より曳き、日永より木遣り音頭にて夕方山内に到着し、つるされた。5月3日には当日雨天ながら、放光寺から稚児行列が出、鐘楼にて撞初行道が行われ、報恩講組の法中によってお勤めが勤修されました。経費としては、鑄造料金六万円、祝儀壹万円、香取秀真氏に参万円等である。

棟札に書かれていた鐘楼のできるまで



顕正寺鐘堂棟札留書訓読

当鐘堂は嘉永五年子の八月発起し、嘉永六年丑の七月始める所です。同嘉永七年寅二月廿日より三月朔日まで地固めし、四月廿三日柱を立て、凡そ六月中旬までに扇垂木打ってしまおうとしましたところ、六月十四日夜八ッ時の大地震で、三重郡方面でも凡そ七八十ヶ寺ほどの寺院が倒れたほか、多くの人が圧死しました。しかし当村や当寺の諸堂は、たまたま無難で被害を免れましたがそのため大工は暫く総休みとなり、漸く九月になってから毎日仕事にかかり、十月上旬皆成就になりました。

鐘楼に寄せる思いー梵鐘新鑄記

顕正寺鐘銘意訳

顕正寺の以前の梵鐘は、延宝六年京都の近藤丹波の弟子久政が鑄造したものでした。

しかし、昭和十八年四月、戦争が激しくなり兵器増産のため梵鐘を差し出しましたが、まもなく戦争が終わりました。

檀信徒衆はみんな、元の姿にしたいと相談して新しく鐘を作ろうと鑄物師に注文しました。

昭和二十二年に新しい鐘が完成しました。鐘の主な銘「梵響聞十方」のご文字は、本山のご法主頂いたものです。

ほかの天女などの装飾は、みな皇室技芸員香取秀真氏(六十四歳、後の文化勲章受章者)の作です。鑄造は、桑名市矢田の中川裕次氏です。

この鐘の音を聞いて悩みや心にかかることを除こうと願えば、信心のふかさに関わらず、誰もがみんな仏の国に行くことができます。

昭和二十二年四月 椎木山顕正寺二十四世真明院慧光記